



富士精版印刷株式会社

東淀川納税協会常任理事

代表取締役社長 里永 健一郎 氏 Satonaga Kenichiro

企画から完成品まで、一貫体制でワンストップ サービスを提供する総合印刷会社

富士精版印刷株式会社は、昭和25年の創業以来、各種の印刷・製版・製本業、広告の企画・立案及び制作等を行っている。主にオフセットカラー印刷を手がけており、企画から完成品まで一貫して行うことのできるシステムを完備し、お客様から好評を博している。「技術向上第一主義」を掲げる同社は、さらなる技術の向上に力を入れるだけでなく、開発した新しい技術を広く公開し、印刷業界の発展に貢献し続けている。

技術向上第一主義

添田●御社の事業内容について教えてください。

里永●当社は、昭和25年にオフセットカラー印刷を行う会社として創業し、今年で65年を迎えます。パンフレットやカタログなどの商業印刷から、時代に合わせたデジタルカタログなどのサービスまで幅広く提供しています。

添田●印刷だけでなくさまざまな取組をされているんですね。

里永●はい。また、創業以来、主に製薬メーカーと取引させていただいており、薬品関係等の包装紙を印刷していましたが、そのような業界では一文字のミスが人の命に関わりまします。そのため、当社は「技術向上第一主義」を掲げ、技術革新に努めてきました。

これまで培ってきた正確さや精密さの求められる印刷技術は、当社のベースになっていますし、得意としている分野です。当社では昨年から「薬用草木」というカレンダーを制作していますが、これは高精細印刷



インタビュー
添田尚子 (そえだ・しょうこ)

フリーアナウンサー。これまで「かんさい思い出シアター」
 『ぐるっと関西おひるまえ』(NHK)などに出演。趣味は、
 英会話、ジョギング、ポストカード集めなど。



「薬用草木」カレンダー

を追求したものです。

添田 ●とてもきれいな印刷ですね。

里永 ●今年「薬食同源」をテーマに、薬にもなり食品にもなる植物を集めています。

添田 ●ウコンやハトムギなど珍しい花と解説が載っていますね。

里永 ●そうですね。技術力などのPRも兼ねて、得意先などにお渡ししています。他にも、社内には企画デザイン部門や撮影スタジオがあるので、企画から完成品まで一貫して行うことができます。創業60周年を迎

えた時に『白描源氏物語』という本を刊行しまして、これはまさに当社で一貫してつくったものですね。

添田 ●拝見しましたが、とても鮮やかで美しい本ですね。こうした御社独自の商品もつくられるということですね。

技術の公開

添田 ●さまざまな技術革新を行ってきたとお聞きしましたが、具体的にはどういった技術があるのですか。

里永 ●当社で開発した技術の一つに「完全棒積み1万枚」というものがあります。印刷機で印刷した紙は、排出された場所にどどん積み上げていきます。印刷の終わった紙は、まだインクが完全に乾いていないため、たくさん積み上げると、紙の重さで下の方の用紙に圧がかかりすぎて裏移りしてしまいます。
添田 ●裏にインクがついてしまうと商品にならないですよ…。

里永 ●そこで当社は、十数年かけて、印刷機械・印刷用紙・インク・水質

状態・温度・湿度などの研究を行って、印刷した紙を1万枚重ねても裏移りしない「完全棒積み1万枚」という技術を開発しました。これにより、従来は裏移りしないように一定枚数ごとに手作業で板を挟んでいたのですが、その必要がなくなり、現場の省力化・省人化を実現することができました。この技術は、全国の印刷会社に公開して、今ではこれが一般的な技術となっています。

添田 ●このような新しい技術を独占せずに公開しているのですね。

里永 ●印刷業界が発展してほしいという想いで、惜しみなく当社の技術を公開しています。他にも、この業界で初めて常温ワンウェイシステムという技術を開発しました。

添田 ●どういった技術なのですか。
里永 ●オフセット印刷では水を使いますが、従来はこの水を冷却し、循環させて使うことで、どうしても廃

「商いは高利をとらず正直によき品を売れ末は繁盛」

現会長の想いを経営理念とし、経営の透明性を大切にしています。

液が出てしまいました。しかし、常温ワンウェイシステムでは水を冷却せず、ちょうど必要な分だけの水を使います。これにより、水を循環させる必要をなくし、廃液を出さないようにしました。環境に優しいだけでなく、電気代の節約による経済的な効果もあります。

添田 ● この技術も公開されているのですか。

里永 ● はい。ホームページ等でも広く公開しています。

ガラス張り経営

添田 ● 御社の経営理念を教えてください。

里永 ● 当社は「商いは高利をとらず正直によき品を売れ末は繁盛」を経営理念としています。代表取締役会長の石川忠は父親の経営していた紙メーカーの倒産を経験して、社内融和と信用の大切さを痛感したそうです。当社では、そういった問題に対

する有効なツールとして、決算報告などを掲載した社内報を発行しています。このような情報を公開することで、昇給や賞与についての社員の理解も深まりますし、株主などからの信用度アップにもつながります。社内報ではありますが、実際は社外報といったところですね。

添田 ● とても珍しい取組をされているのですか。

里永 ● また、事故が発生すると、発生源部署や事故内容、損失金額が書かれた事故報告書というものをまとめますが、これを不良見本とともに社内でも回覧することで、原因を追求し、会社全体で再発防止に取り組みます。そして、これらの中から特に目立った事故をまとめて『品質管理365日』という本をつくっています。事故の原因や発生プロセスの分析だけでなく、損失金額もしっかりと掲載しています。

添田 ● 損失金額まで載っているのですか。まさにガラス張りですね。

里永 ● この本は、印刷工業組合を通じて、同業者の方々に無償で配付しています。「こういう事故が起きたときにはこうしたらいいんだな」というようにたくさんの方に読んでいただき、活用してもらえればと思っています。

添田 ● この取組はいつごろから始められたのですか。

里永 ● 「事故はかくすな、正直に報告し、原因を追求せよ」という方針に基づいて、昭和61年に現会長の石川が直接管轄する品質管理室を開設したのが始まりです。事故の発生をいかにして抑えるかが私の使命だと考えています。

人材育成

添田 ● 社員教育や人材育成などはいかがですか。

里永 ● 「教育は油断をするな。絶えずたゆまず教育し、成長してほしい」という方針の下、人材育成には大き

富士精版印刷株式会社

本社 ● 大阪市淀川区西宮原2-4-33

設立 ● 昭和25年

事業内容 ● 各種の印刷・製版・製本業、広告の企画・立案及び制作等。

く力を入れていきます。新入社員研修では全ての部署で研修を行って各工程を勉強してもらいますし、ベテラン社員に対しても、資格の取得や研修・セミナーへの参加を積極的に勧めています。費用は会社で負担して、資格取得者には手当を出しています。

添田 ● 社員のモチベーション向上にもつながりますね。

里永 ● はい。他にも、月に一度、社内講師による社内研修会も行っています。

添田 ● 社外から講師を招くのではなく？

里永 ● 以前は社外から講師を招いていましたが、今は社内講師を重要視しています。「社内でこういう問題があった」「ここに気をつけよう」「この部分を強調して営業しよう」といった話ができますし、その方が頭に残ると思いますからね。

添田 ● 工場見学や研修なども受け入れてお聞きしましたが…。

里永 ● 工場見学には同業者の方もた

くさん来られますし、中学生の職業体験や他社の新入社員研修なども受け入れています。いろいろな方に印刷について知ってもらって、印刷業界に興味を持ってくれたら嬉しいですし、社会貢献という意味合いもありますね。

添田 ● 実際に印刷されている現場を見ることはあまりないでしょうし、とてもいい機会ですね。

今後の展望

添田 ● 今後、力を入れていきたいところなどはありますか。

里永 ● 紙媒体の印刷物をいかに伸ばしていくか、というところですね。

添田 ● ネット社会が発達してきましたし、最近ではデジタル商品が増え、紙の印刷物が減ってきていますものね。

里永 ● そうですね。今の時代に合わせたデジタル商品ももちろん必要ですが、やはり紙には温かさがあると

思います。紙媒体が減っていることは確かですが、紙にこだわって、紙を主とした事業を展開していきたいですね。

添田 ● 今だからこそ紙の良さを大事にしたいですよ。

里永 ● こういう考えは、工場見学などを受け入れる理由の一つでもあります。色々な紙の良さを広く伝えて、印刷業界がもっと発展してくれればと思います。

添田 ● 本日はありがとうございました。



創業60周年を迎えた時に刊行した『白描源氏物語』